

トラック 26

昔々、父と母がいて子供をもうけ、イブナシーヤと名付けた。彼は 10 歳になって両親を失った。彼には面倒を見てくれる人がいなかった。15 歳の頃、彼はひとりの老婆に会い、彼女が彼の面倒を見ることを引き受けたが、彼女はとても貧しく、彼らは貧しさから抜け出ることが出来ず、食べ物にも事欠いた。

或る日、イブナシーヤはスルタンに出会い、彼に宮殿での仕事をくれるように頼んだ。スルタンは彼が若すぎるし、仕事はないと答えた。イブナシーヤは懇願したがスルタンは断った。イブナシーヤはこの惨めさからどうやって抜け出るかわからず、とうとう泥棒になった。

或る日、彼はスルタンの家に泥棒に入ったが衛兵に捕まってしまった。スルタンのところに連れて行かれ、スルタンは尋ねた：「私の家に泥棒に入っていいと誰に言われた？」。

イブナシーヤは答えた：「私はあなたに仕事をもらうようお願いしたのですが、あなたは私を雇うことを断りました。貧しさから抜け出る方法がなく、泥棒になったのです」。

「そういうことならお前を助けよう。お前はそれに値する、お前は苦境から抜けようとしたが出来なかった。私はスルタンだから、わが民は助けを乞いに私のところにやって来る。お前は他にそれほど選択がなかったのだから、私がお前を助けなかったということで、押し込みに入ったのは理解出来る」。

スルタンはイブナシーヤに仕事を見つけてやった。スルタンには娘がいた。イブナシーヤと娘は人目を忍んで会い、娘はとうとう孕んでしまった。しかし彼女はそのことを父親に言うことが出来ず、雇い人のひとりと通じていたということで殺されるのが怖かった。彼らはどうすればよいかわからず、イブナシーヤは村から逃げ出した。

彼は森の中を長い間歩き続け、洞穴に隠れた。彼は愚かなことをしてしまったことを反省した。仕事が出来たのに、スルタンの娘を孕ませたことですべてを失ってしまった、と思った。彼は洞穴の中に深夜まで留まっていた。すると声を聞いたので、こんな夜遅くに森の中で話をするのは一体誰だろうと思った。彼は近寄っていき、ジン達が住んでいる大きな家を見つけた。家の中には金銀、他の財宝があった。

イブナシーヤがジン達の様子を窺うと、彼らは食事の最中だった。夜が明けるとジン達は家から出て行った。イブナシーヤは家に入って食べ物を取った。夜になるとジン達が戻って来たが、彼らは人間の臭いに感づいた。彼らは人間を探し始めたが、見つけることは出来なかった。翌朝になるとジン達はまた出て行った。イブナシーヤは家に入って食べ物を取った。夜が来て、ジン達は戻り、またおかしい臭いに気がついた。彼らは仲間の一人を屋根の上に置くことを思いついた。そのジンの目的は、他のジン達が戻るのを聞いて、人間を捕まえることだった。

翌日、イブナシーヤは待ち伏せにあっていないことを知らず家に入り、食べ物を取った。屋根に隠れていたジンが彼に飛びかかり、捕まえて縛り上げてから言った：「今晚お前を食べてやる。ここに何をしに来た？」。イブナシーヤは答えた：「あなた方に食べられても構いません。いずれにしても僕には失うものなんかありません。どこでも僕は受け入れてもらえません。ここでも森の中でも私を殺していいですし、町の中ならスルタンが僕を殺すでしょう」。

夜になって他のジン達が家に戻ってきてイブナシーヤを見つけ、同じ質問をした：「お前は誰だ？ 何故我々の家に許しを得ないで入ってきた？ 何故、我々から盗んだのだ？」。イブナシーヤは事の次第をすべてジン達に話し、彼らに言った：「私を殺すか放免するか今考えてください」。ジン達は答えた：「お前が事の成り行きを我々に語ったからには、友となろう。我々はお前を助けることが出来るが、それには町へ行って素性を変え、スルタンの娘と結婚しなくてはならない。後に素性を明かすにしろ、とにかくスルタンの娘と結婚するのだ」。

「わかりました。しかし、スルタンが娘を僕と結婚させるなんてことになれば驚きです。何しろ僕は貧しいのですから。彼女と結婚するにはたくさんのお金が必要になりますからあなた方の助けが必要になります」。ジン達は彼に金と馬、立派な衣服を与えた。彼がそれを身に着けると王子のようだった。ジン達は彼に名前を変えるよう助言した。彼は村に着いて、公共の場に姿を現し、スルタンへの面会を求めた。スルタンが到着した時、イブナシーヤは言った：「私はさる町の王子です。私はあなたの娘との結婚を望んでいます。彼女がとても美しいという噂を聞いたからです」。

スルタンは答えた：「私の娘があなたのような王子と結婚することに同意はしますが、本人の承諾がなければ受けることは出来ません。彼女の考えを尋ねる必要があります」。

「それならば、私が彼女と話し合います。但し、二人だけにして下さい」。娘が連れて来られ、彼女はイブナシーヤに会ったが、結婚の申し込みは断った。彼が理由を聞くと、彼女はようやく話し出した：「私はイブナシーヤという名前の男と一緒にいました。彼は私を孕ませ、出て行ってしまいました。だから私はあなたとは結婚出来ないのです。私は他人の子供を孕んでいるのですから。こんな私のことをどう思われるでしょう。お願いですから、このことについては父に何も言わないで去って下さるようお願いします」。

イブナシーヤは彼女に言った：「そんなことは問題ではありません。あなたと結婚すれば、それは我々の子供と言われるでしょう」。

「それは本当に確かですか？」。

彼らは結婚し、イブナシーヤは妻に素性を明かし、彼が逃げた理由を語った。彼女はこれを聞いてとても喜んだ。彼らは子供を儲け、スルタンは年と共に老いていた。イブナシーヤは新たなスルタンになり、義理の父に本当の正体を明かした：「私はイブナシーヤです。あなたの昔の使用人です」彼は自分に起こったことをもう一度語り、スルタンは答えた：「お前は気高くこの冠にふさわしい、お前は私の名誉を傷つけることを恐れたからだ。お前が逃げたのは、私への敬意が欠けていたからではなかった。だから、この冠はお前に正当なものとして戻ってきたのだ」。